

## 令和3年度評価委員会の結果（令和2年度終了課題に対する事後評価）

### <評価委員一覧>

氏名	現職等
後藤 晋	東京大学大学院農学生命科学研究科 附属演習林教育研究センター 准教授
原口 雅人	埼玉県中央部森林組合 森林管理アドバイザー
永沢 晴雄	埼玉県山林種苗協同組合 理事

※所属は、令和3年10月現在のものです。（敬称略）

### <評価結果>

研究課題名	低コスト広葉樹林更新技術の確立	
研究担当	森林環境担当	
研究期間	平成28～令和2年度	
研究概要	<p>(1) スギ・ヒノキ人工林伐採跡地の広葉樹林化技術の検討</p> <p>シカの影響のあるミズナラ・サクラ植栽地で坪刈りを実施したところ、坪刈り区ではシカ侵入防止柵から侵入したシカによる被害が大きく、作業のため刈り払った部分に誘導された可能性が考えられた。そこで苗木の周囲を刈り残し、頂芽周辺のみ刈り払う「坪残し刈り」、対照として無下刈り区をミズナラで比較したところ、坪残し刈りでは樹高成長量が有意に高かった。根元成長量も高く、枯死率、被害率が低い傾向があった。放置林分状況調査では全体の種数は18種となり、2016年から3種減少した。モミジイチゴ等の先駆樹種の本数の減少が大きかった。高木性樹木の侵入は2年目以降新たな樹種は確認されず、放置状態ではまだ初期の遷移段階にあると考えられた。</p> <p>(2) 高齢化したコナラ林更新技術の検討</p> <p>高齢コナラ林伐採跡地において各成長期後に萌芽調査を実施した結果、高齢になるほど萌芽発生率、萌芽枝本数が低下した。一方で残った萌芽枝は伸長成長を示すことが判明した。67年生の萌芽発生率は1成長期後41.9%から5成長期経過後に22.6%、68年生では14.3%から4成長期後に9.5%、76年生では10.4%から3成長期後に10.3%まで減少した。伐採から3成長期が経過した時点では、伐採高が高く幹本数が多い株ほど、萌芽枝サイズは大きくなった。全体として60年生を超えると萌芽更新は難しいものの、40～50年生程度では萌芽が発生する可能性があり、その際、伐採株1株あたりの幹本数が成否を検討する指標となり得ると考えられた。</p>	

	<p>カシノナガキクイムシのモニタリング調査では、調査地点 6 カ所のうち、所沢市で捕獲があった。県内のボランティア団体等の協力を得て実施した初発日調査では予想以上に早く、4 月下旬にカシナガが確認された。また、令和 2 年度までに 17 市 3 町までナラ枯れの疑いが報告され、10 市 1 町でカシナガが確認された。</p>	
研究評価	評価の要素	目標達成度：c
		活用見込み：c
	総合評価	C